石崎光瑤　渡欧紀行文（前編）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学芸術資料館 公開日: 2020-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松井, 菜摘 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/00000382

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

石崎光瑤　渡欧紀行文（前編）

松井　菜摘

【抄録】
京都市立芸術大学芸術資料館収蔵の石崎光瑤写生帖 141 冊のうち，10 冊には大正 11 年 12 月に日本を発ち，翌 12 年の上半期に旅行したヨーロッパでの写生が遺されている。ヨーロッパでの動向を伝える日記も書かれており，精力的に教会や美術館を訪れ名品を実見し，作品解説を記すなど光瑤の西洋絵画の受容も知ることができる。これまで語られることが少なかった光瑤の渡欧の様子がうかがえる紀行文として貴重である。本稿では、大正 12 年 1 月 25 日から 2 月 18 日まで書かれたフランス及びイタリア紀行文を書きおこし，その前編を紹介する（後編は次稿掲載予定）。

はじめに

京都市立芸術大学芸術資料館では，石崎光瑤の写生帖 141 冊を所蔵している。そのうちの 10 冊には，大正 11 年 12 月に日本を発ち，翌 12 年の上半期に旅行したヨーロッパでの写生が遺されている。ヨーロッパの植物や鳥だけでなく，ルーブル美術館の展示品，寄港地に滞留する船や異国の人々等も丁寧な筆致で描かれている。またヨーロッパでの動向を伝える日記も書かれており，光瑤の足取りを辿ることができる。本稿では、大正 12 年 1 月 25 日から 2 月 18 日まで書かれたフランス及びイタリア紀行文を書きおこし，前編，後編に分けて紹介する。

1.　石崎光瑤とは

石崎光瑤（明治 17－昭和 22／1884－1947）は，華麗で装飾的な花鳥画を手がけた日本画家である。富山県西砺波郡福光町（現南砺市）に生まれ，幼い頃から絵を描くことを好み，金沢に在住していた琳派の画家・山本光一に師事し，「光瑤」の雅号を与えられた。明治 36 年，京都に出て竹内栖鳳の竹杖会に入塾し，新古美術展や文展で入選を重ねた。大正 5 年，6 年のインド旅行に取材した成果を，7 年第 12 回文展及び翌 8 年第 1 回帝展で≪熱国妍春

≫，≪燦雨≫として発表し，2 年連続の特選となった。大正 11 年には帝展審査員を務め，その直後の 12 月 12 日，門司港より北野丸にてヨーロッパ旅行に出発した。大正 14 年京都市立絵画専門学校の助教授となり（昭和 11 年教授に就任），後進の指導にあたりながら官展で作品の発表を続けた。昭和 8 年インドを再び旅行し，帰国後高野山金剛峯寺の襖絵を制作。終戦後京都市立美術専門学校を辞任すると，その翌年病に倒れ，昭和 22 年 3 月に息を引き取った。法名は「林蘭院釈光瑤居士」。

2. 写生帖「外遊紀行文：欧州」（図 1～図 16）

本稿で取り上げる写生帖は，当館で「外遊紀行文：欧州」（収蔵番号 129240608000）と題し収蔵している。大正 12 年 1 月 25 日のフランスのリヨン美術館から，2 月 18 日イタリア・ローマのサン・カリストのカタコンベまでが記述されている。以下紀行文の書き下し文を掲載する。前編は 2 月 5 日の「ラヴェンナ」まで，後編は 2 月 6 日の「フロレンス第一日」からとした。（句読点は筆者による。書き下し文の注は脚注とした。）

リヨンのミューゼ[1]
階段正面神聖の森、右がキリスト教信仰の感化。左の古代の幻影、戸口の両側ローヌとサオン、ゴーガンのタイーチの風俗[2]

九時五十分　リヨンを出づ。佛国最後の停車場（modane）モダヌ[3]にて税関吏来る（朝七時過ぎ）。伊太利最初のステーション Bardonecchie（バルド子ツキ）[4]の辺、断崖白雪皚ことごとく美しありき。Torino[5]に十時半着（伊太利に入りて時計一時間進ましむ）。一時三十分ミラン着メトルポール[6]に入る。

ミラン第一日
サンタマリヤデルグラチエ[7]（寺の名）は煉瓦造り十五世紀のもの。ドミニカン派の僧院な

---

[1] リヨン美術館。大階段には，ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの壁画の連作がある。正面には《芸術と詩神（ミューズ）が愛する聖なる森》、右側壁面には《キリスト教の霊感》、左側壁面には《古代の眺め》を描いている。（東京都美術館・ほか編『リヨン美術館特別展　栄光とフランス近代美術』、読売新聞社，1989 年）
[2] ポール・ゴーギャン（1848-1903）《ナヴェ・ナヴェ・マハナ（楽しき日々）》。（『GAUGUIN』ROBERT GOLDWATER 解説、嘉門安雄訳、美術出版社、1961 年）
[3] モダーヌ。フランス南東部に位置し，イタリアとの国境にある小さな町。
[4] バルドネッキア。イタリア・トリノのフランスとの国境にある町。
[5] トリノ。イタリア北西部のピエモンテ州の州都。
[6] ホテルか。
[7] サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会。

りき。其一部にレオナルドダビンチの壁画[8]が残された。これはダビンチがミランの領主スフヲルツア公爵[9]（エルモーレ）に随つて居た頃の作品也。普通のフレスコと異り壁の上に油絵具で描けり。何故此方法をとつたかと云ふに二ツの理由あり。其一ツはダビンチは科学者なる故取扱上不便なフレスコの絵具に代ゆるに油絵具を用ゆる事に於て何か発見する事あらんと思ひし由。第二はタビンチはゆつくりと念入りに絵を描く人也。故にフレスコならば一間平方ならはそれだけ塗つた日にかいて仕舞はねばならぬ。よくてもわるくてもそれで結果が完つて仕舞ふ。此人の立場から云ふと円熟セる作品が得られない事になる。此タビンチの考は最初は初め旨くいつたが油絵具と壁の収縮の度が一致セさりし故に既に十六世紀末にはひどく破損しかけた。それから後度〻作品の寿命を長く保存する為に色々修復保存法を講したが皆な成功しないのみならず、却つて早める事となつて極最近に千九百〇八年に最後の修覆が加えられて居る。
ダビンチの生きてる中、戦乱に水攻めになつて此壁画の裾迄水に浸された。タビンチが伊太利を最後に去る時は可なりに破損して居て科学的自信も傷けられた。
キリストの死ぬ前夜の徒弟や生涯の喜や煩悶の情を表はした。表情描写の模範的作品と称さる。

ホニムの前の寺院
ミランのイルドゥーモ[10]は式はゴシツク式也。建築面積は百四十八米突と八十八米突あり。高さ屋根迄六十八米突、塔の高さ百八十米突也。全部白大理石也。屋根は花崗岩にてふけり。寺の外廊の人間の塑像は二千を算セり。
是れを建てしは一三八六年ジヤンガレヤスビスコンチ卿[11]がはじめ出した。之を主として作りしは伊太利の建築家、是に獨佛の有名なる建築家が補助に立つた。ところが是等の人々が互いに自己の主張を争つた為に非常に其落成期が延びた。それは千五百年頃の事也。種〻争ひ更められた後に一五六〇年にやつと定まつた計画の下に進んで行き全体が落成セしは一八〇五年なり。式はゴシツクなるも正面は先づル子ツサンス頽廃期と称して可なり。

一月二十七日ミラン第二日目
第一ブレラ画廊[12]　ここは大戦中の影響残り居て大部分閉鎖さる。但しルイニ[13]のフレスコを除いて此画廊中先づ名高いものはすつかり陳列されてゐたのは幸である。
第二

---

[8] レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）≪最後の晩餐≫。
[9] ルドヴィーコ・スフォルツァ（1452-1508）。ミラノ公でダ・ヴィンチの初期パトロン。
[10] ミラノのドゥオーモ。
[11] ジャン・ガレアッツォ・ヴィスコンティ（1351-1402）。初代ミラノ公。
[12] ブレラ美術館（またはブレラ絵画館）。
[13] ベルナルディーノ・ルイーニ（1480 または 1482-1532）。

カステロ（城の意義）スホルツア[14]ニ行く。ダビンチの後援者ルドビコスホルツアの住めるところ。チントレット[15]の肖像光れり。レンブランドの肖像等、他に傑作なし。
第三
ムセヲ（美術館の意義）ポルゲベツオリ[16]　ボチセリ[17]、フランチスコ[18]、シニヨレリ[19]、ルイニ

一月二十八日　ミラン第三日目
サンモーリチヲ[20]ニ至る。ルイニの壁画あり。老尼僧によつて内側に案内さる。頗る美事なり。サンタンブロジヲ[21]ニ行く。建築柱ビサンチン、珍らし絵の見る可きものなし。
サンロレンゾ[22]ニ行く。前に羅馬時代の議政場の柱街上に残れり。両側に電車走れり。境内の壁にビザンチ式彫刻の発掘品を置けり。写真にとる。
午後二時五分ミランを去りパルマに向ふ。四時二十二分着。ホテルクロチエビアンカに投ず。日曜にてダンスの会は賑かなり。途上雪降り積み一望銀色也。

二十九日
パルマはコレツチヲ[23]の名によりて美術史上著名の地となれり。先第一にコレツヂヲの居住地なりし也。四十才にて没す。一四九四年生れ、一五三四年に死セリ。

第一
ドゥーモ[24]はロンバルドローマ式の寺院にして十一世紀中頃に工を起して居るが全体十三世紀のもの也。ここの天井のコレヂヲのフレスコ昇天の図[25]は注文す可きもの也。続いて本堂連続穹窿の上にある図は凡てコレツヂヲの作である。一五二六年より仝三〇年迄の間四年間を要した。

第二

---

[14] スフォルツァ城（またはスフォルツェスコ城）。
[15] ティントレット（1518-1594）。
[16] ポルディ・ペッツォーリ美術館。
[17] サンドロ・ボッティチェッリ（1445-1510）。
[18] ピエロ・デッラ・フランチェスカ（1416/1420-1492）か。
[19] ルカ・シニョレッリ（1450 頃-1523）。
[20] サン・マウリツィオ教会。
[21] サンタンブロージョ教会。
[22] サン・ロレンツォ大聖堂。
[23] コレッジョ（1489-1534）。
[24] パルマ大聖堂。
[25] パルマ大聖堂天井画≪聖母被昇天≫。

バツチステロ（洗礼堂）[26]は八角堂にして全体大理石を以て成れり。年代は十三世紀也。周囲に浮彫りにて聖書の事蹟及象徴を彫つてある。此作者はアンテラミ[27]也。内部は又彫刻と十三世紀のフレスコを以て埋められてある。

第三パラツツヲ、デラ、ピロツタ（ピロツタ宮殿）[28]十六世紀の建築中に図書館及画廊あり。普通パルマのピナコテカ（画廊の意）と云へは此宮殿の画廊の事を云ふ也。ここにある絵の傑作はコレジヲの油絵及フレスコ也。ここの老番卒に案内されて

第四
コンベルトディサンパウロ[29]の中のコレチヲの壁画を見た。それを出て
（修道院）

第五
サンジオヴァンニエヴアンヂエリスタ寺院[30]のコレヂヲの壁画を見た。此建物は十六世紀にして正面は十七世紀バロック式にしてさして注目す可きものにあらず。但し後の戸は注目す可し。コレヂヲと其弟子パルムザンの壁画あり。
午後四時五分パルマを出立し六時過ボロニアに着く。ホテルブランに入る。

一月三十日
ボロニアは伊太利の最も古き最も文化の至つた町として古来有名也。街其ものも一種の藝術品である事に注意す可し。即ち建築上より云へは宮殿官邸悉く連続穹窿又は角塔が建つて居り十三世紀より十四世紀に亘つての所謂ル子ツサンス初期建築の立派なる標本也。これ程完全に美術の背景を保存してるところはボロニヤを除いて他になし。欧洲全体に於ける最古の大学の起りしところ也。
絵画史上にてここに特筆す可き事蹟は全盛期ル子ツサンスが衰ろへ十六世紀末より十七世紀初めにかけてミケランゼロ、チシアン[31]等の模倣者の藝術が徒らに芸術の発展を妨げる如きものを発表セる時に際し、カラツチ[32]一派が起つて古典主義を標榜して健全なる芸術の本道を後人に教えたのである。尤も此運動は後にアカデミズム（官学派）の濫觴となつたけれ徒又彼等の感化によつてプツサン[33]の如き大家をフランスに出したる如き功績あり。

---

[26] パルマ洗礼堂。
[27] ベネデット・アンテーラミ（1150 頃-1230 頃）。
[28] パラッツォ・デッラ・ピロッタ（ピロッタ宮殿）。
[29] サン・パオロ修道院。
[30] サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂。
[31] ティツィアーノ・ヴェチェッリオ（1488 または 1490 頃-1576）。
[32] カラッチ（1557-1602）。
[33] ニコラ・プッサン（1594-1665）。

朝アカデミア[34]に行く。時間早き故（十時開館）サンステフアノ[35]に行く。此寺は四世紀に創建されたものであろう。併し洗礼堂の内部にある説教台を見るに先づ十二世紀のもの也。それによつて外部内部の装飾を見るに多くは十一二世紀の跡を留めて居る。
サンジヤコモ、マジョーレ[36]に行く。入口にパルマと仝じ獅子の柱座あり。フラチヤ[37]の聖母子及四聖徒ニ音楽天使の祭壇あり。此絵はフラチアの最も傑作也。フランチアは一四五〇年に生れ一五一七年に死す。ボロニヤ派画家として先のカラツチ一派に先つ一世紀著名なりし人也。
其絵に向つて左にロレンゾコスタ[38]のフレスコ生と死の勝利あり。一四八八年になりしものなり。

サンドメニコ[39]に行く。建築は十三四世紀の形をよく代表セリ。中にフィリツピノ、リツピの聖母の絵[40]あり。
アカデミアに帰る。
此所にてはボロニア派画家の代表的作品あり。所謂復期ル子ツサンスのものであつて迚も一流のものではない。併しラフアエルの傑作「サンタセチリア」[41]及びペルヂノの「聖母の光栄」[42]あり。先づ以て多日の労を醫すると云ふ可し。

「一月三十一日」
朝サンマルコ[43]に行く。聖マルコの遺骨をアレキサンドリアより運びて葬りしところ也。八二九年にして翌年より建築に着手セリ。幾時か修覆の後十一世紀より変更し十五世紀に完成セリ
モザイクは最も古きは第十世紀に遡る事を語るも大部分は十二世紀より十四世紀迄の作品多し。

---

[34] ボローニャ国立絵画館（アカデミア）。
[35] サン・ステファノ大聖堂。
[36] サンジャコモ・マッジョーレ教会。
[37] フランチェスコ・フランチャ（1450 頃-1517）。
[38] ロレンツォ・コスタ（1460-1535）。
[39] サン・ドメニコ教会。
[40] フィリッピーノ・リッピ（1457 頃-1504）≪聖カタリナの神秘の結婚≫。
[41] ラファエロ・サンティ（1483-1520）≪聖セシリア≫。
[42] ペルジーノ（1448 頃-1523）≪栄光の聖母子と四聖人≫。
[43] サン・マルコ大聖堂。

徒歩にて河畔添ひに嘆息橋[44]を見つつサンガツカリヤ[45]　ここの本堂の左手礼拝堂にジョバニベリニの聖母子像[46]あり。内陣にムラノ作祭壇三点あり。チントレツトの作品未完成のもの[47]あり。
出でて
パラツチデュカレイ[48]に行く。八一四年に
（宮殿）（大総領
建築さる。サンマルコの火事の時焼けて大部分の建ちしは一一〇五年頃也。重なるものチントレツトのギリシヤ神話を題材にセし四作[49]、ベロ子ネーズ[50]の「エーラツプの昇天」を初めとして此両大家の壁画無数にしてチントレツトの天国の大画面等あり。チシアンのフレスコ聖クリストフ[51]あり。

午後
ゴンドラにて向が嶋のサンジョルジヲ、マジョーレ[52]に行く。ここにチントレツトの七絵[53]あり。内陣にコルパツチヨのサンジョルジヲの悪龍退治の絵[54]あり。更に水を隔てしヂユデツカ嶋のレデントーレ[55]に行く。此レデントーレの本堂祭壇にはマツツアの大理石浮彫あり。僧に案内されて内陣に入る。内陣に聖母子を取扱った三点の絵あり。それはベデカ[56]及僧の

---

[44] 溜め息の橋。イタリア北東部、ベネト州の都市ベネチアにある、ドゥカーレ宮殿と旧監獄を結ぶ、運河上に架かる橋。この橋を渡り監獄に入れられた罪人たちが溜め息をつくことから、その名が付けられた。漁色・冒険の生涯を送ったカサノバが脱獄に成功したという逸話が残っている。（小学館大辞泉編集部編『大辞泉』下巻、小学館、2012 年）
[45] サン・ザッカリア聖堂。
[46] ジョヴァンニ・ベリーニ（1430 頃-1516）≪サン・ザッカリア祭壇画≫。
[47] ティントレット≪洗礼者ヨハネの誕生≫か。
[48] ドゥカーレ宮殿。
[49] ティントレット≪バッカスとアリアードネーとヴィーナス≫、≪ウルカヌスとキュクロープス≫、≪メルクリウスと三美神≫、≪マルスを追い払うミネルヴァ≫。
（『Tintoretto』Francesco Valcanover、Terisio Pignatti 解説、若桑みどり訳、美術出版社、1988 年）
[50] パオロ・ヴェロネーゼ（1528-1588）。
[51] ティツィアーノ・ヴェチェッリオ≪聖クリストフォロス≫。（フィリッポ・ペドロッコ『ティツィアーノ　ヴェネツィアの画家』イタリア・ルネサンスの巨匠たち 24、池田亨訳、東京書籍、1995 年）
[52] サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会。
[53] ティントレットの工房から 7 作品が同聖堂に納められたが、ティントレット自身の作品は≪最後の晩餐≫、≪マナの収集≫、≪キリストの埋葬≫の 3 作品である。
（『Tintoretto』Francesco Valcanover、Terisio Pignatti 解説、若桑みどり訳、美術出版社、1988 年）
[54] ヴィットーレ・カルパッチョ（1450 頃-1525 頃）≪聖ゲオルギウスと竜≫。
[55] レデントーレ教会。
[56] 旅行案内書のこと。

説明によれば悉くベリニの作と成れるも実はヴイバリニ[57]とビツソロ[58]の聖母と聖徒也。ここにカルパツチヨの作と称する聖母子像あり。却ゝよいものである。多分其派の人であろう。

「二月一日」
サンジヨーバンニ、ウパウロ[59]へゴンドラにて行く。カラバツチヨの作僧と聖クリストフの三図面[60]あり。他にベツソロの聖母子像あり。
次に
サンタマリヤフヲルモサ[61]に行く。ここにパルマベツキヨ[62]のサンタバルバーラあり。此人第一の傑作也。
次に
サンジヨルジヲデゲリスキヤボニ[63]に行く。ここにカルパツチヨのみを以て満さる。
最後に川向ふのサンタマリヤデラサルテ[64]に行く。ここにチシアンの聖霊降臨の図及数点[65]あり。
午後
アカデミヤ[66]に行く。カルパツチヨのサンタウルスラ物語[67]の数点の大作の一室あり。次にチントレツトのサンマルコの奇蹟[68]あり。其他ベニス派のベリニ親子の作品[69]あり。
次に
スクオラサンロツコ[70]に行。是れは殆んと全部チントレツト也。
此スクオラサンロツコの僧、議員の会議セし上此装飾画をベニス派の出色の画家にかかす為に競技を促す事とした。是れに馳セがつた中に当時の新進作家多かりき。ベロ子ーズ、チ

---

[57] アルヴィーゼ・ヴィヴァリーニ（1446-1502）か。
[58] バッサーノか。
[59] サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂。
[60] カラヴァッジョ作と記されているが、ジョバンニ・ベリーニ≪聖ウィンケンティウス・フェレリウス多翼祭壇画≫左部分の≪聖クリストフォルス≫か。（マリオリーナ・オリヴァーリ『ジョヴァンニ・ベッリーニ　ヴェネツィアの画家』篠塚二三男訳、東京書籍、1995 年）
[61] サンタ・マリア・フォルモサ（フォルモーザ）教会。
[62] パルマ・イル・ヴェッキオ（1480 頃-1528）。
[63] サン・ジョルジョ・デリ・スキアヴォーニ信徒会。
[64] サンタ・マリア・デッラ・サルーテ聖堂。
[65] ティツィアーノ・ヴェチェッリオ≪聖霊の降臨≫、≪玉座の聖マルコと聖人たち≫、≪ダビデとゴリアテ≫、≪イサクの犠牲≫、≪カインとアベル≫、≪ペンテコスト≫等。
[66] アカデミア美術館。
[67] ヴィットーレ・カルパッチョ≪聖ウルスラ伝≫連作。
[68] ティントレット≪奴隷の奇蹟≫。
[69] 父ヤーコポ・ベッリーニ（1400 頃-1470 頃）、子ジョヴァンニ・ベッリーニ。ジョヴァンニ・ベッリーニ≪洗礼者ヨハネと聖母子≫。
[70] スクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコ（サン・ロッコ大信徒会）。

ントレツトも其一人なりき。各素描の小下絵を以て是に舊する訳であつた。ところかチツトレツトは小さな小作品を提出する事を面倒がり其腹案になるものを直ちに大画布に揮毫して競技会に出た。会心会心競議が初まると其腹稿を拡げて見セん。是れを見て他の画家等は色を失つて競技を断念した。自然当選者はチントレツトに擬セられたが規則に違反セる故衆儀急に決セさりき。併し結局チントレツトのものとなつた。それよりチントレツトは十二年間一年六千デユカの俸給を受けて此寺院の大作を試みた。是れがチントレツトの名をベニスに知らしめた紀念の作品である。

二月二日

朝マドンナデルオルテ[71]ニ行く。ここにチントレツトの「世界の終」「金の犢の礼拝」「聖処女の宮詣」シマ、ダコン子グリヤノ[72]作「洗礼者と四聖徒」
次に
サンタカテリナ[73]に行く
ここのベローニズ[74]祭壇正面の絵は無くなり僅ニ二流処のチシアンチントレツを見に辞した。
次に
サンサルバトーレ[75]ここの正面祭壇のキリスト変貌は模写を以て代えられてある。ベリニの「エンマウスの巡礼」[76]チシアンの「受胎告示」ペザロの「マドンナ」の二あり。此最後の二ツは傑作也。
午後
マセヲチビコ[77]に行く。サンマルコの向なり。ここにカルパツチヨの「二人の遊女」[78]あり。他に武器等の陳列あり。
次にフラリ寺院[79]に行く。此処のチシアンの聖母昇天の図[80]は此大家の宗教画中最上のものである。惜しきかな、ベニスにて見るチシアンは主として宗教画の範囲に止まつて居る事が多く其真面目を発揮セる。美人画肖像画の傑作に至つては如何してもフロレンスのピツチ

---

[71] マドンナ・デッロルト教会。
[72] チーマ・ダ・コネリアーノ（1459 頃-1517 頃）。
[73] サンタ・カテリーナ教会。
[74] パオロ・ヴェロネーゼか。
[75] サン・サルヴァトーレ教会。
[76] ≪エマウスの巡礼≫。
[77] コッレール美術館。
[78] ヴィットーレ・カルパッチョ≪二人の貴婦人≫。
[79] サンタ・マリア・グロリオーザ・デイ・フラーリ聖堂。
[80] ティツィアーノ・ヴェチェッリオ≪聖母被昇天≫。

美術館[81]に行かなければならぬ。

「二月三日」
朝サンカツシヤノ[82]に行きチントレツトの十字架上のキリストを見十一時四十五分の汽車にてパドバ[83]に行きマドンナ、デル、アレイナ寺院[84]にヂヨツトの聖母キリスト一生記のフレスコを見出でゝ、エレ、ミタリ[85]に至りマンテニア[86]のフレスコを見る。三時四十五分発四時四十分ヴエニスに帰る。

「二月四日」（ヴエニス出発）
朝十一時四十分ヴエニス出発フエラヽ[87]にて乗換え一時間謀り待ち四時四十五分出発。ラヴエンナ[88]に六時五十分着。ホテルサンマルコに入る。

「二月五日」「ラヴエンナ」
朝八時四十分宿を出でサンヴイタレ[89]を観る。是れは六世紀中頃のもの也。特に注目を向きしは内部のモザイク也。それにはチユスチニアン帝とテオドラ皇后の像[90]幷にクリスト地球に君臨す[91]及アブラハムの犠牲[92]其他
〇ムセヲナチョナレは此寺の一部に移されて居た。ここに古代装飾彫刻及墓碑銘の断片等納められて居た。次にガーラプラチイヂアの墓所[93]に行く。そこにも五世紀のモザイクあり。「善き羊飼いの図あり」此天井の中央にあるキリスト洗礼の図は頗る優れたるもの也。
〇次きにドーモ[94]の近くのバチステロ[95]を見た。ドーモの内陣にて象牙彫の椅子を見た。ビザンチン小彫刻の技術を歌ふに恰好のもの也。
サンアポリ子レヌオボ[96]を見た。ここにキリストの礼拝の大画面本堂の両壁にモザイクを以

---

81 ピッティ美術館。
82 サン・カッシャーノ教会。
83 パドヴァ。イタリアのヴェネト州にある都市。
84 スクロヴェーニ礼拝堂。
85 エレミターニ市立美術館。
86 アンドレア・マンテーニャ（1431-1506）。
87 フェラーラ。イタリアのエミリア＝ロマーニャ州にある都市。
88 ラヴェンナ。イタリアのエミリア＝ロマーニャ州にある工業都市。
89 サン・ヴィターレ聖堂。
90 ≪ユスティニアヌス帝と随臣≫のモザイク及び≪皇妃テオドラと侍従≫のモザイク。
91 ≪キリストと天使≫のモザイク。
92 ≪アブラハムの饗応≫のモザイク。
93 ガッラ・プラチーディア廟墓。
94 ラヴェンナ大聖堂。
95 ネオニアーノ洗礼堂。
96 サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂。

て飾らる（男女行列の分[97]）。
十一時四十分ラヴエンナ発五時過ぎにフロレンス[98]に着。ホテルベルキエレに投ず。此間山を過ぎ村落丘陵甚た情趣あり。小雨降れり。駅にて馬車に大な蝙蝠傘をさセる。珍らしかき

3. おわりに

以上，石崎光瑤の写生帖「外遊紀行文：欧州」の大正 12 年 1 月 25 日のフランスのリヨン美術館から，2 月 5 日の「ラヴェンナ」までの書き下し文を紹介した。光瑤の旅の行程は，別表及び地図としてまとめた。1 日あたり約 4 か所の教会や美術館を訪れており，ヨーロッパ旅行の一部分とはいえ精力的な行動がうかがえる。サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会のダ・ヴィンチ作品やサンロッコ大信徒会のティントレット作品など，作品に関する詳しい記述も見られる。光瑤も属した竹内栖鳳塾は西洋美術の資料も所蔵しており，事前に得ていた知識も旅に活かされていただろう。丁寧な記録を見ると，大正 5，6 年のインド旅行後に刊行した『印度窟院精華』のようにヨーロッパ旅行記刊行も視野に入れていた可能性もある。

光瑤の渡欧に先行して，同じく栖鳳塾の土田麦僊や小野竹喬ら国画創作協会会員が滞欧していた。今回の紀行文には，彼らとの交流については記述がないが，吹田草牧の『渡欧日記』（『視る』京都国立近代美術館ニュース 382 号，385 号，平成 11 年）では麦僊や黒田重太郎らと一時行動を共にしたことが記されている。同時期に渡欧していた画家たちの紀行文を通して，さらに光瑤のヨーロッパでの動向を明らかにしたい。

次号では紀行文後編を掲載する。

---

97 ≪殉教者の行進≫と≪聖女の行進≫。

98 フィレンツェ。メディチ家の支配のもとでイタリアルネサンスの中心地となった。

別表

日付	国	地域	訪問先
1月25日	フランス	リヨン	リヨン美術館
1月26日	イタリア	モダーヌ バルドネッキア トリノ ミラノ1日目	（移動） サンタ・マリア・デッレ・グラツィエ教会 ドゥオーモ
1月27日		ミラノ2日目	ブレラ美術館（ブレラ絵画館） スフォルツァ城 ポルディ・ペッツォーリ美術館
1月28日		ミラノ3日目 パルマ1日目	サン・マウリツィオ教会 サンタンブロージョ教会 サン・ロレンツォ大聖堂 （移動）
1月29日		パルマ2日目 ボローニャ1日目	パルマ大聖堂 パルマ洗礼堂 ピロッタ宮殿 サン・パオロ修道院 サン・ジョヴァンニ・エヴァンジェリスタ聖堂 （移動）
1月30日		ボローニャ2日目	ボローニャ国立絵画館（アカデミア） サン・ステファノ大聖堂 サンジャコモ・マッジョーレ教会 サン・ドメニコ教会
1月31日		ヴェネツィア1日目	サン・マルコ大聖堂 サン・ザッカリヤ聖堂 ドゥカーレ宮殿 サン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂 レデントーレ教会
2月1日		ヴェネツィア2日目	サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ聖堂 サンタ・マリア・フォルモサ（フォルモーザ）教会

			サン・ジョルジョ・デリ・スキアヴォーニ信徒会 サンタ・マリア・デッラ・サルーテ聖堂 アカデミア美術館 スクオーラ・グランデ・ディ・サン・ロッコ（サン・ロッコ大同信組合）
2月2日		ヴェネツィア3日目	マドンナ・デッロルト教会 サンタ・カテリーナ教会 サン・サルヴァトーレ教会 ムセオチビコ（コッレール美術館） サンタ・マリア・グロリオーザ・デイ・フラーリ聖堂 ピッティ美術館
2月3日		ヴェネツィア3日目 パドバ	サン・カッシャーノ教会 スクロヴェーニ礼拝堂（マドンナ・デル・アレイナ寺院） エレミターニ市立美術館
2月4日		ヴェネツィア フェラーラ ラヴェンナ1日目	（移動）
2月5日		ラヴェンナ2日目 フィレンツェ1日目	サン・ヴィターレ聖堂 ガッラ・プラチーディア廟墓 ラヴェンナ大聖堂 ネオニアーノ洗礼堂 サンタポリナーレ・ヌオヴォ聖堂 （移動）

地図

フランス
リヨン
モダーネ
ミラノ
パルドネッキア
トリノ
ヴェネツィア
パドヴァ
パルマ
フェラーラ
ボローニャ
ラヴェンナ
フィレンツェ
ピサ
アレッツオ
ペルージャ
アッシジ
オルビエート
ヴァチカン
ローマ
イタリア

図 1

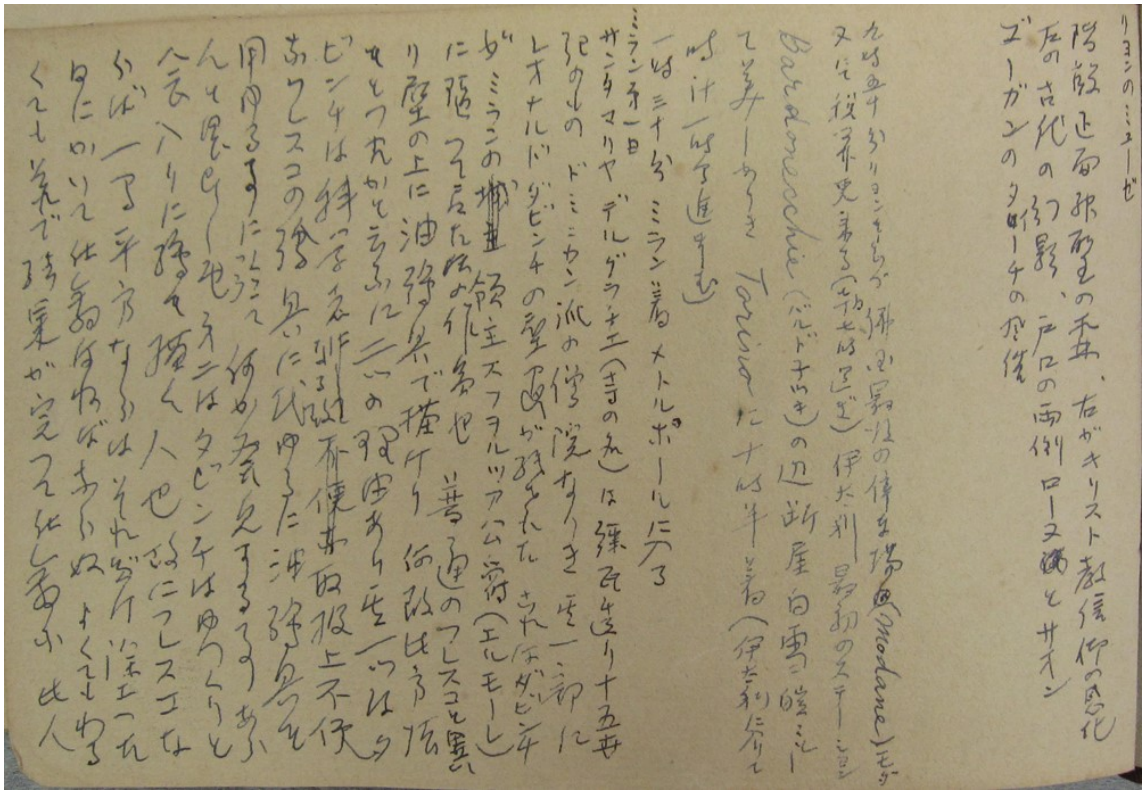


図 2

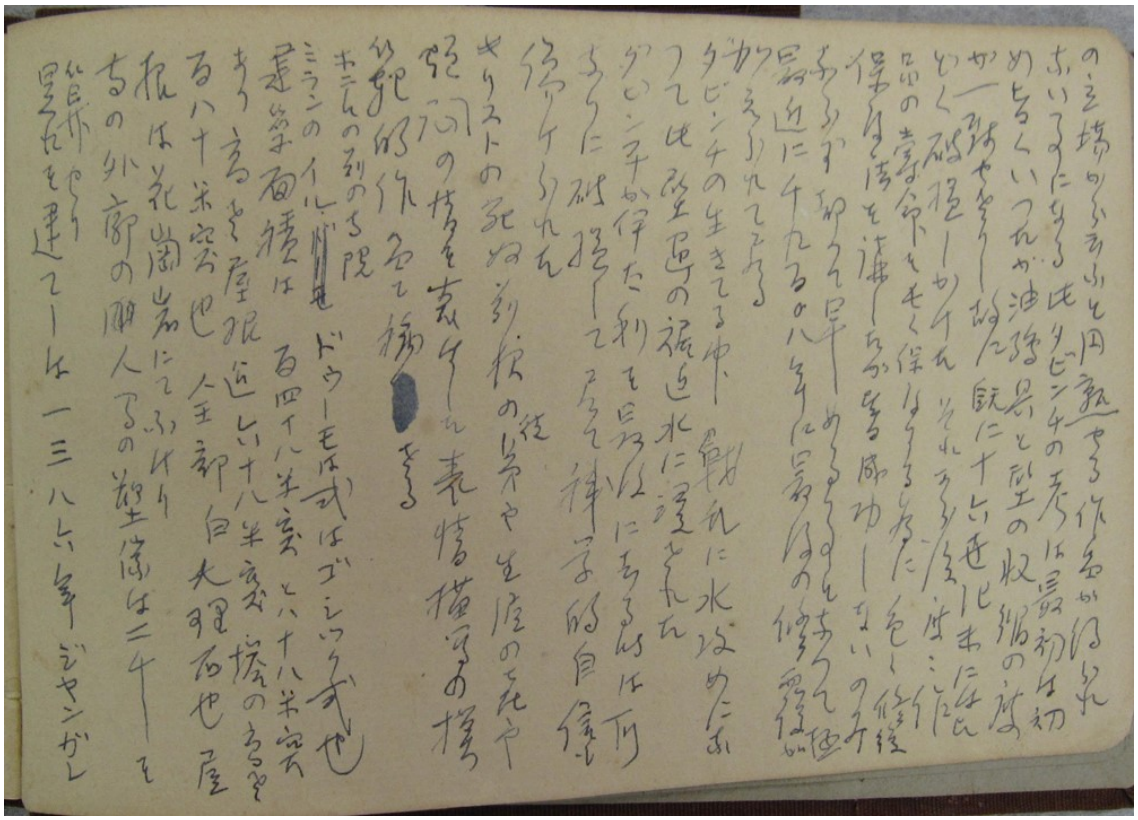


図 3

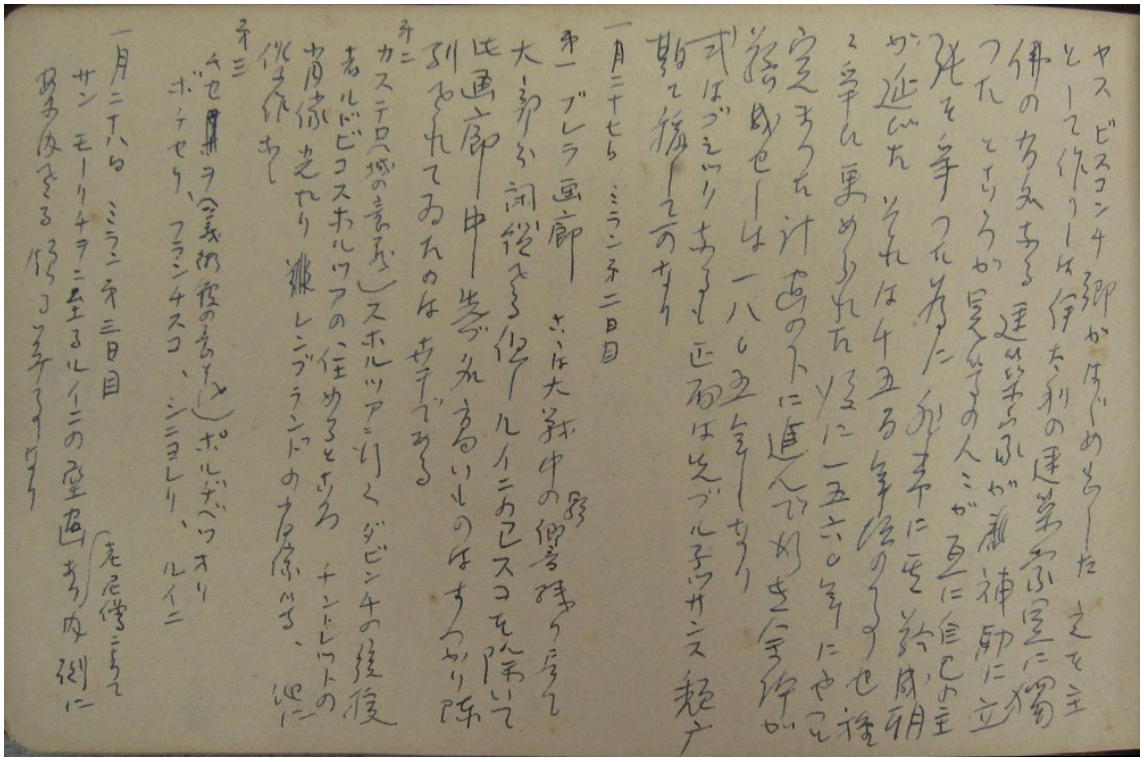


図 4

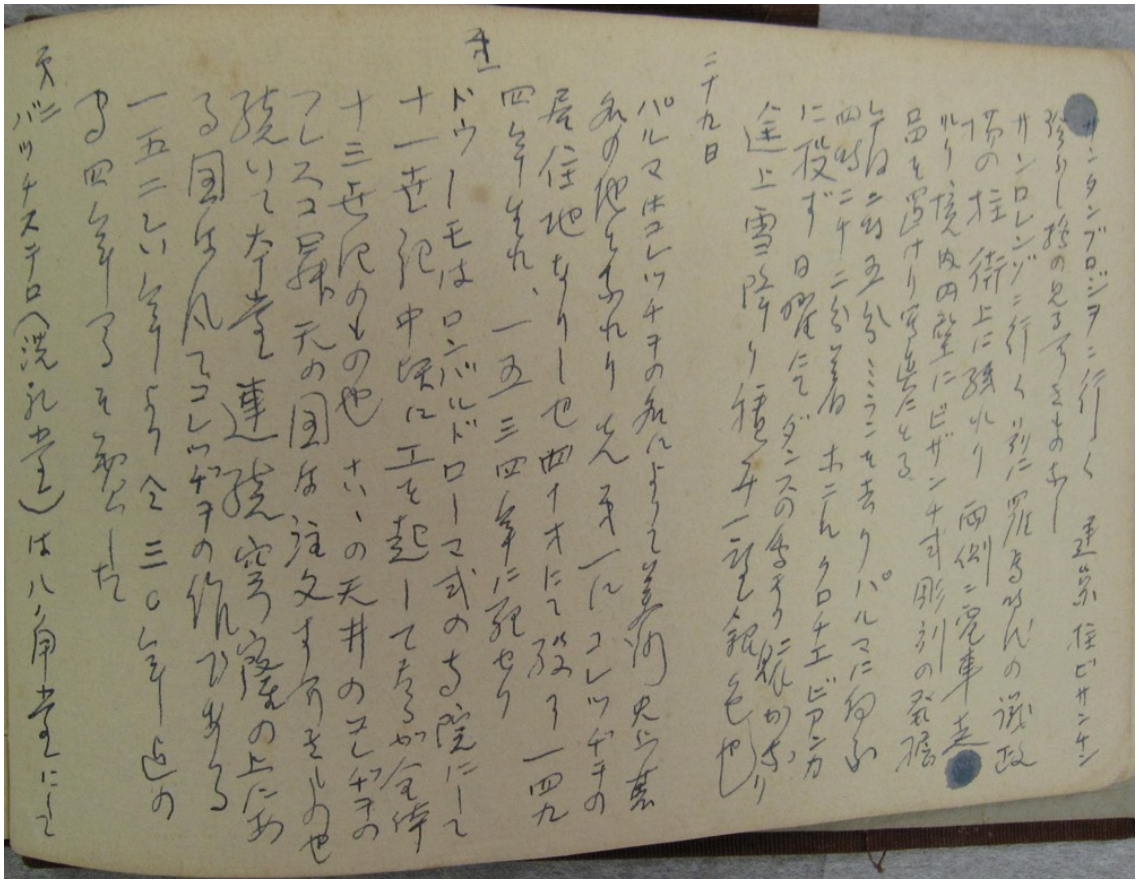


図 5

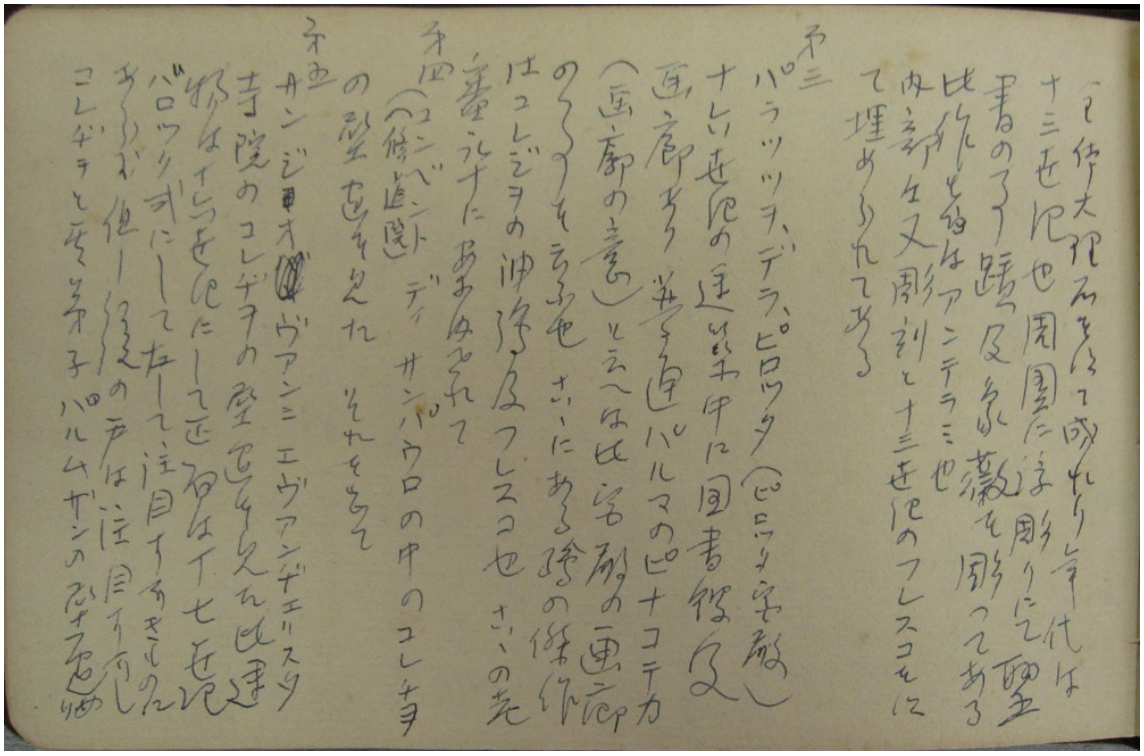


図 6

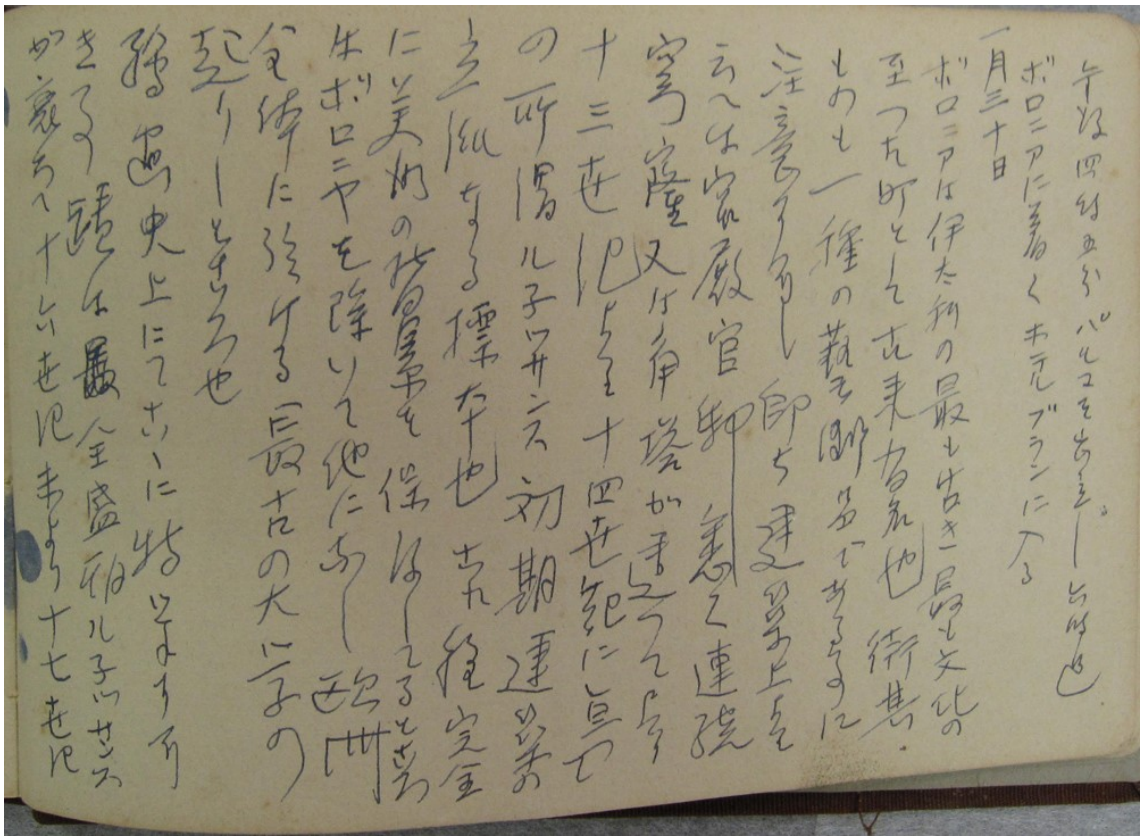


図 7

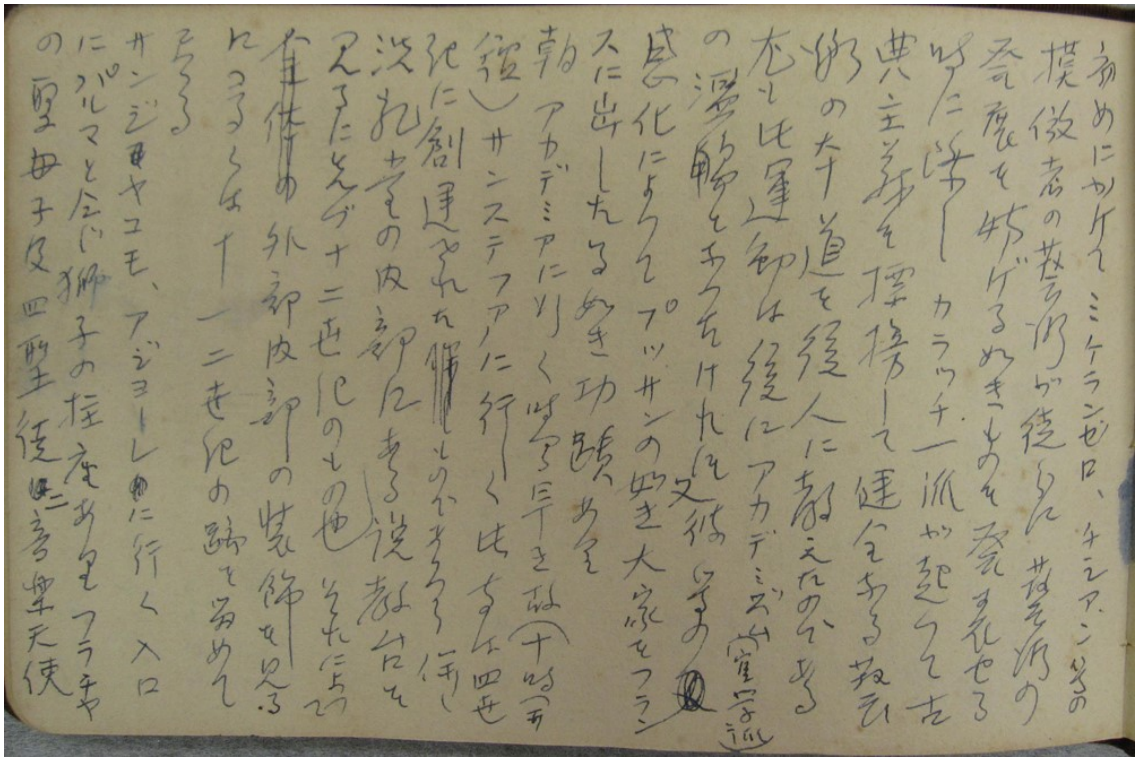


図 8

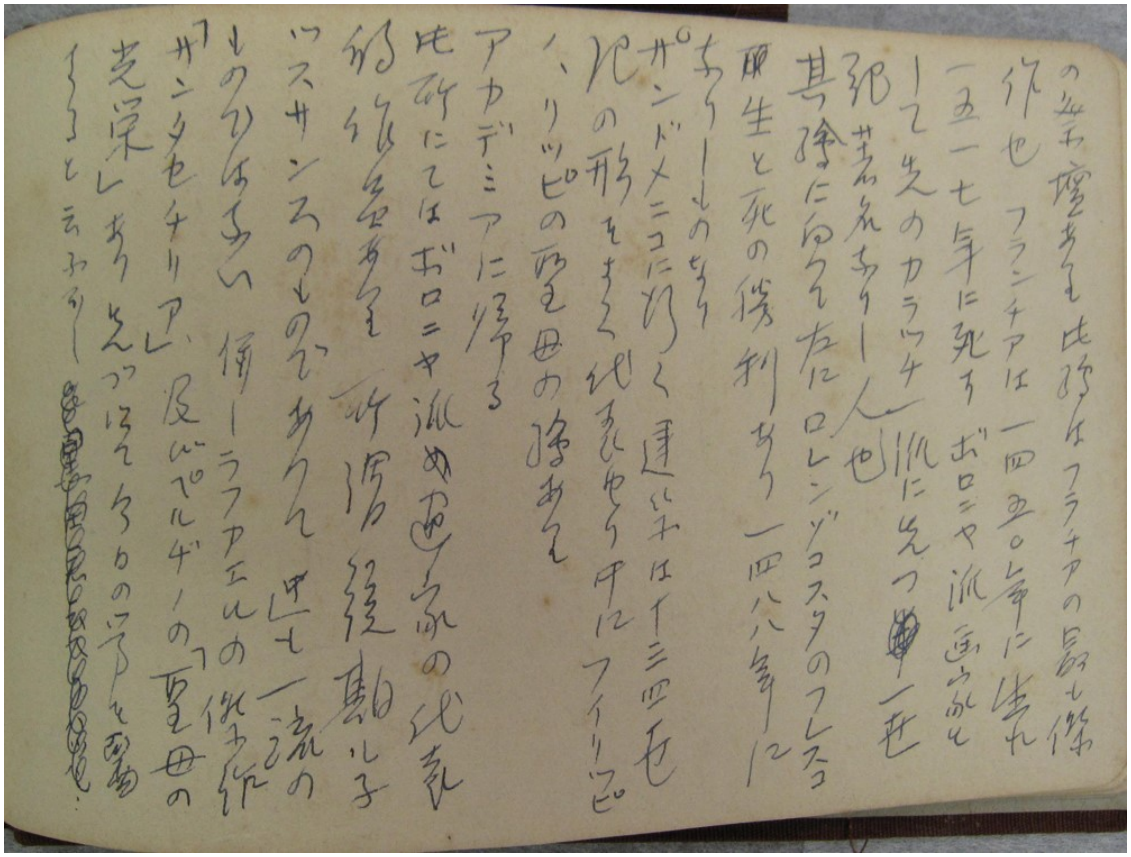


図 9

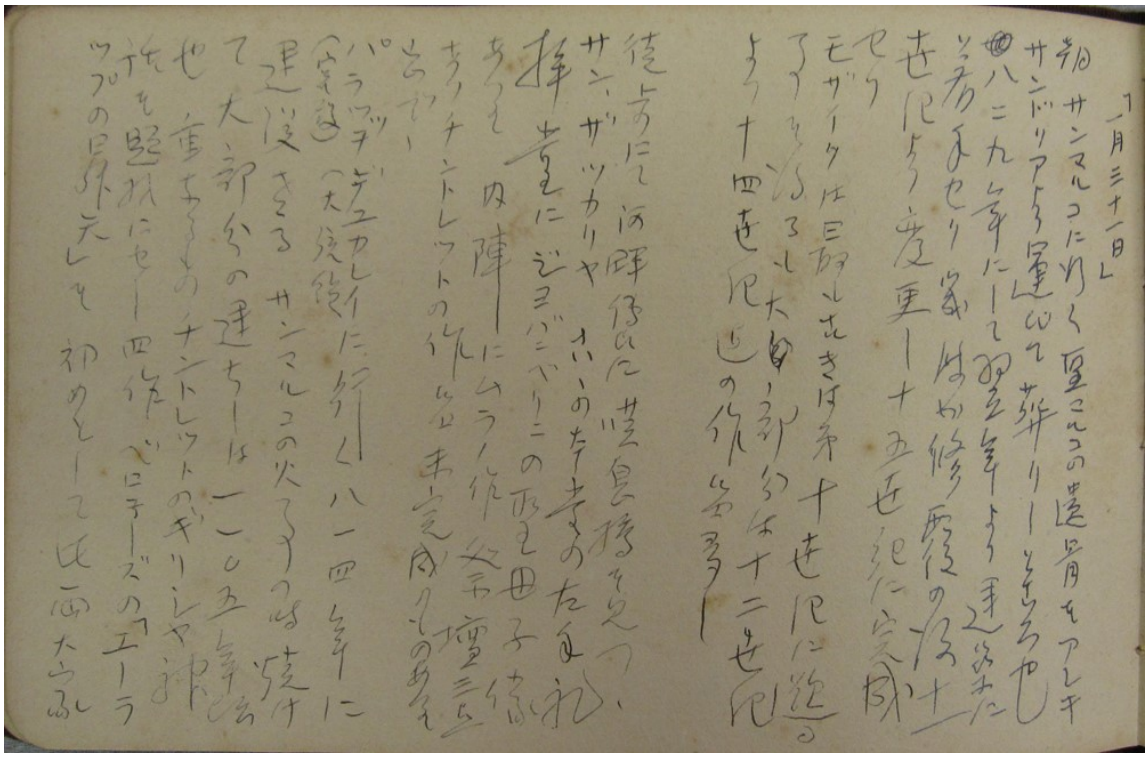


図 10

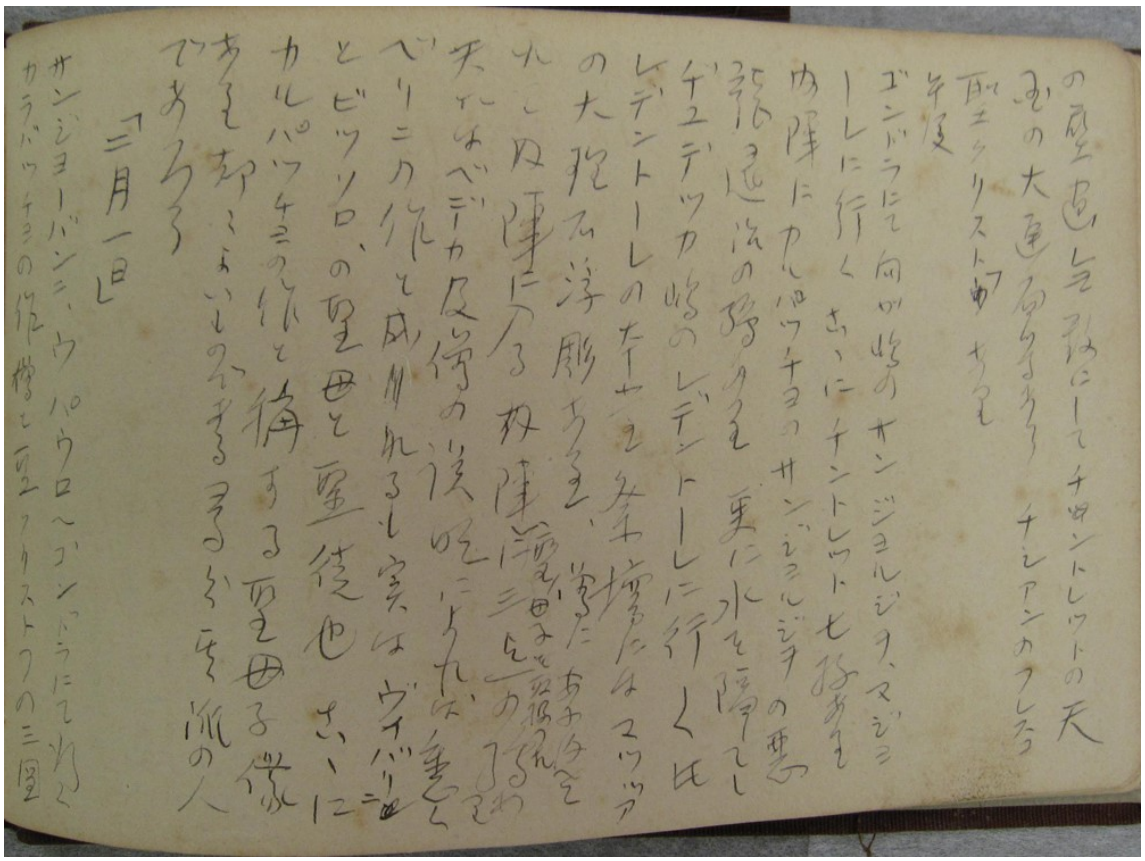


図 11

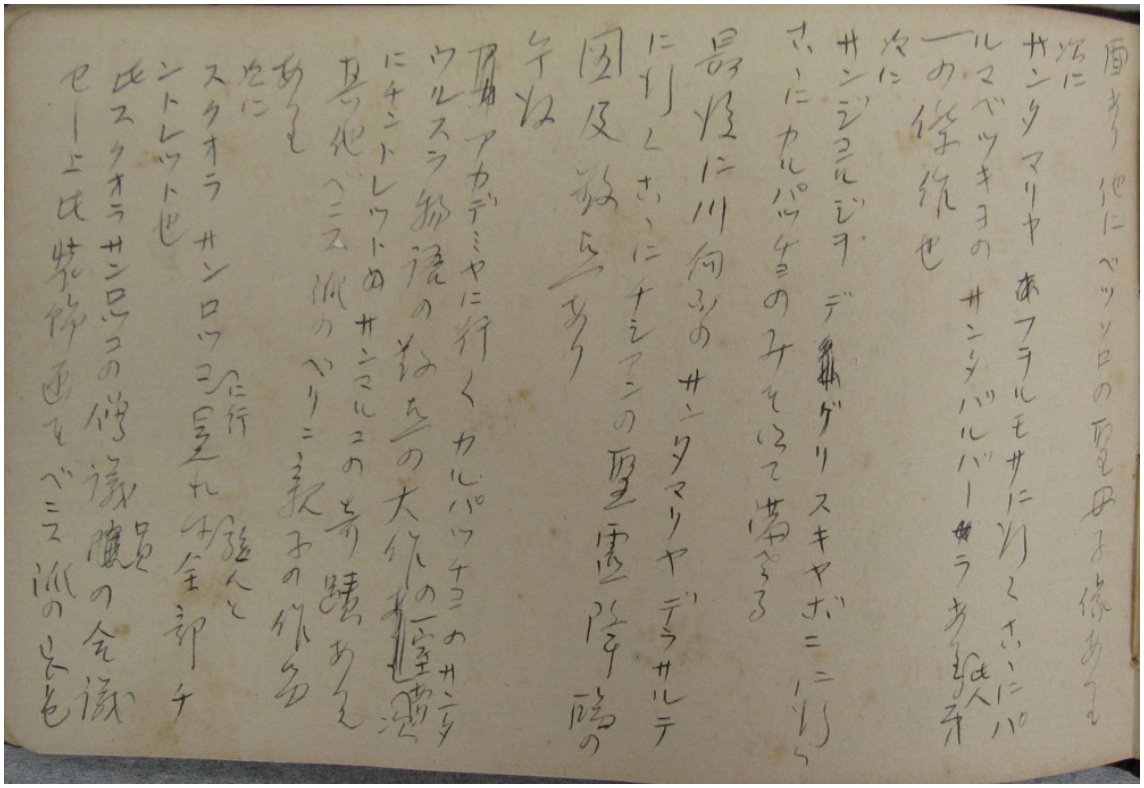


図 12

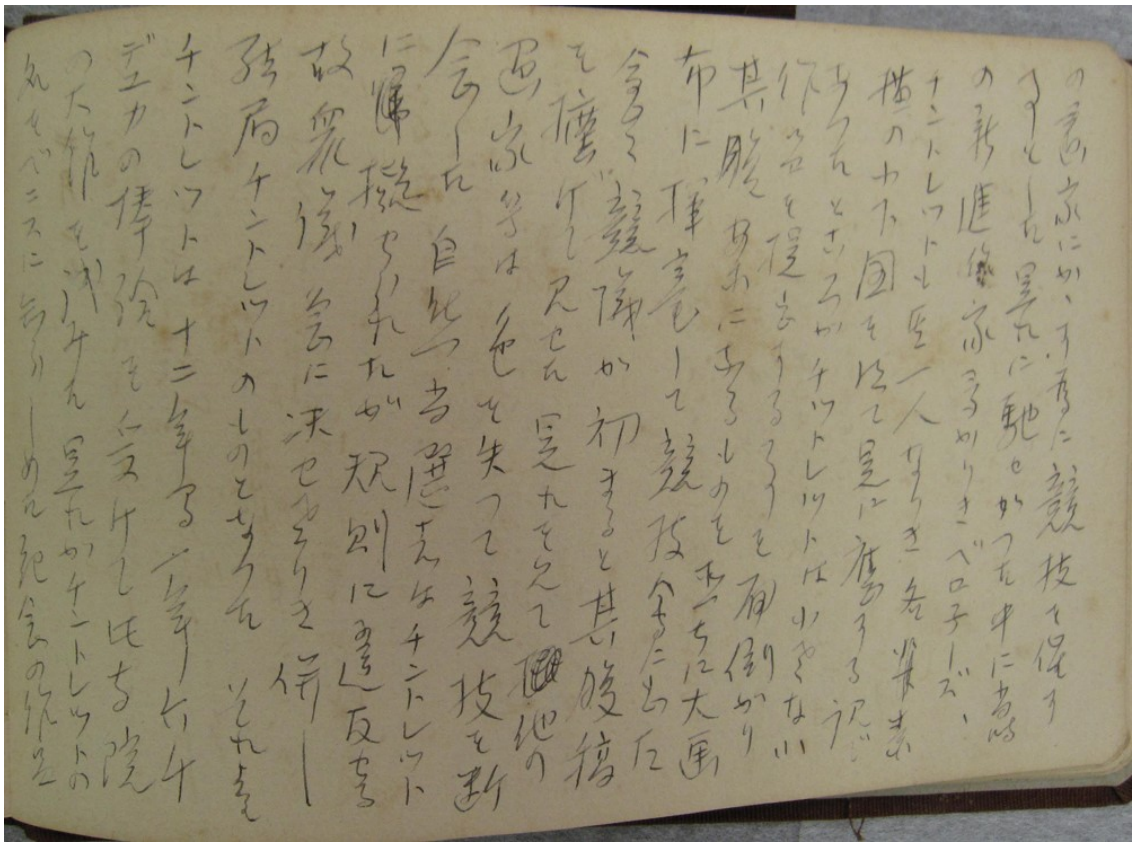


図 13

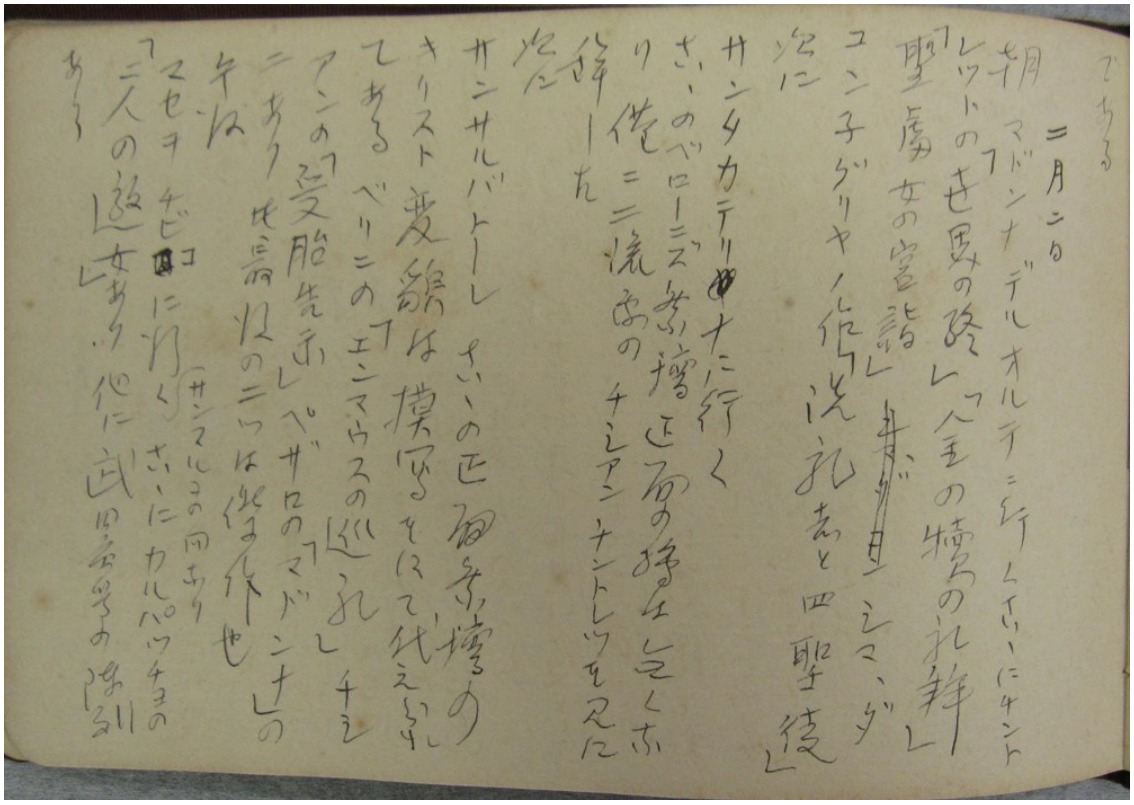


図 14

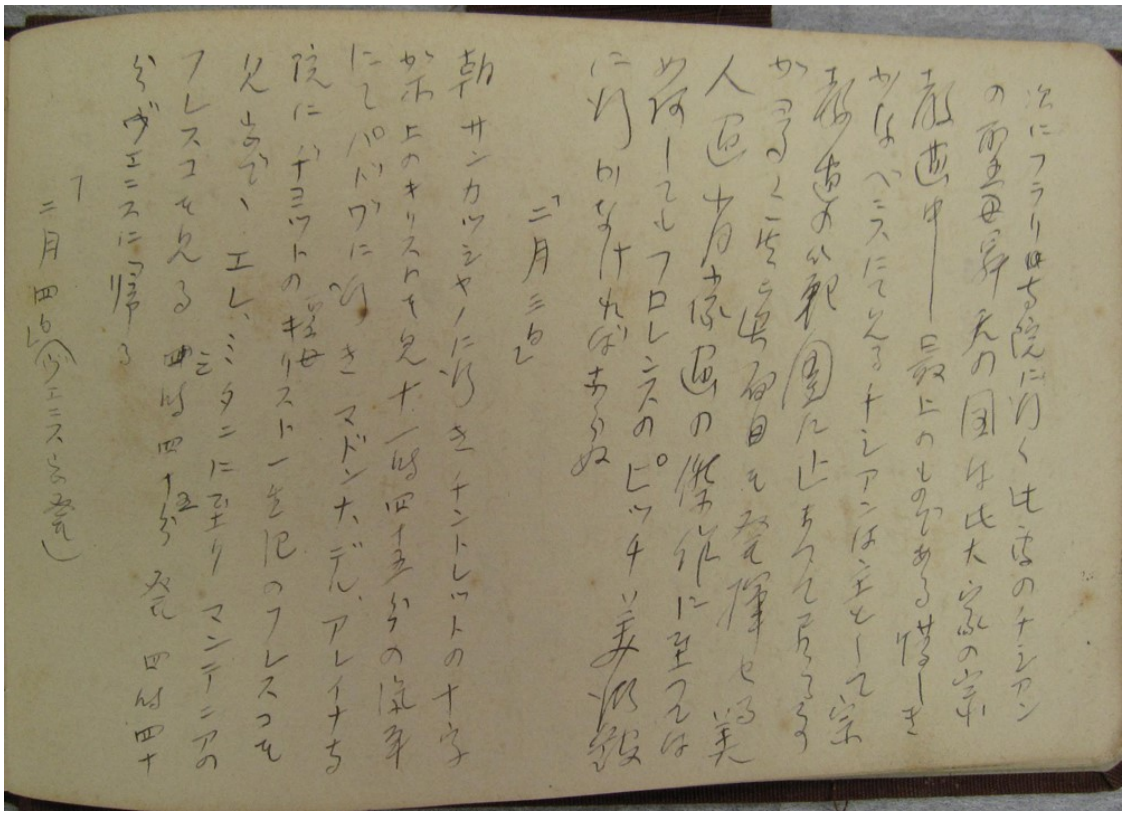
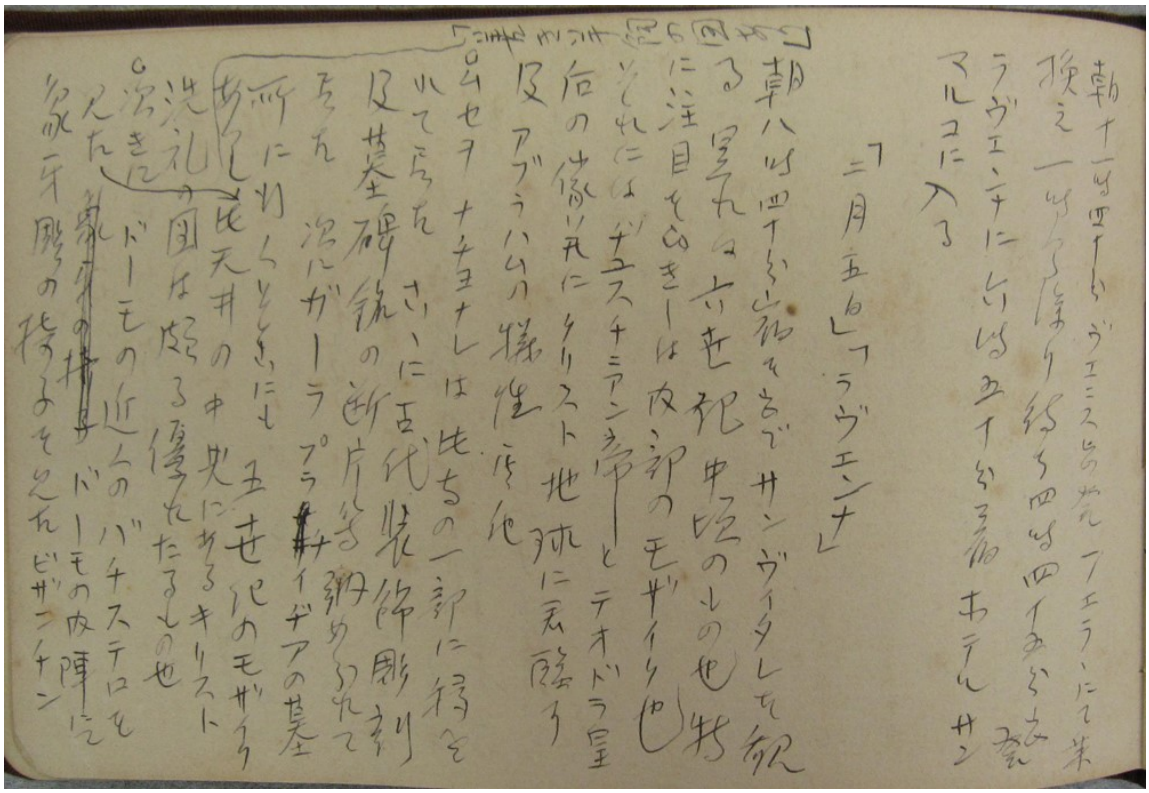


図 15

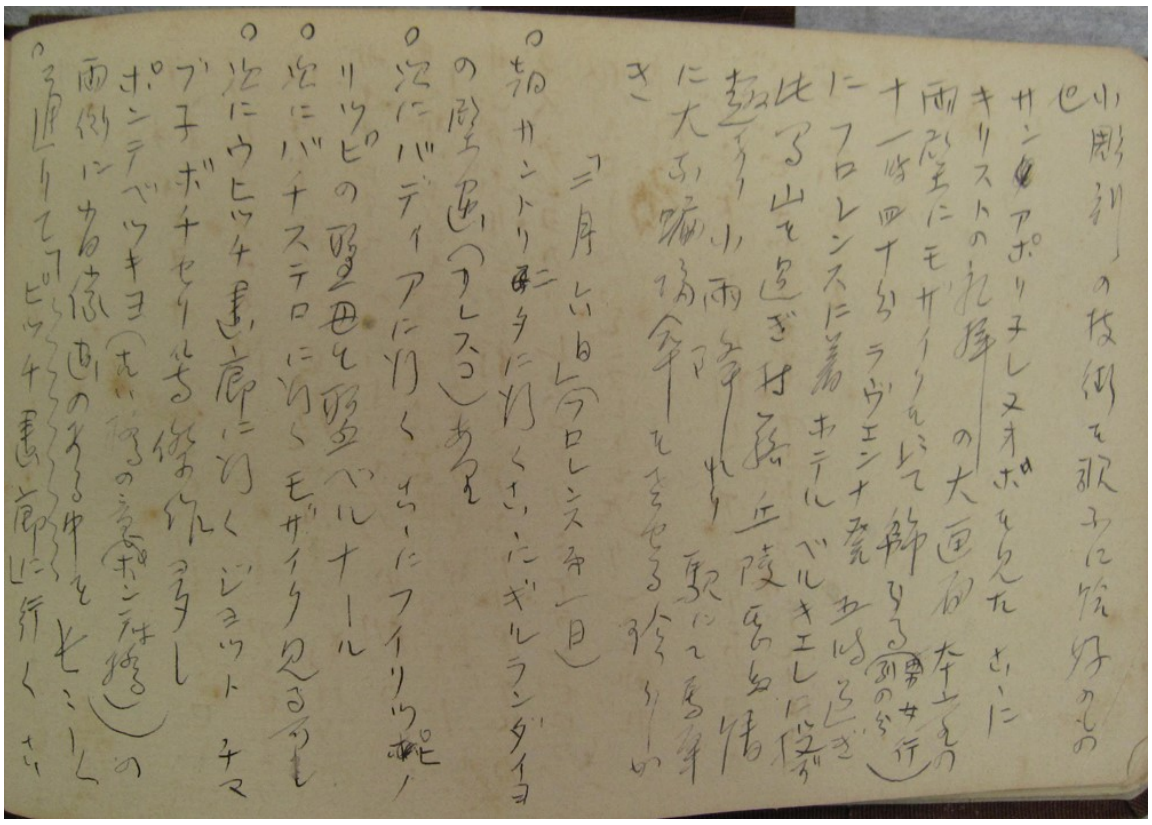


朝十一時四十分ヴェニスの汽車にて来
換え一時半頃より終り四時四十分発
ラヴェンナに向ひ五時半着ホテル サン
マルコに入る

「二月五日」「ラヴェンナ」

朝八時四十分宿を出でサンヴィタレを訪
る 見れば六世紀中頃のものにて特
に注目を惹きしは内部のモザイク画
それには ユスチニアン帝とテオドラ皇
后の像以外にクリスト地球に立脚す
及 アブラハムの犠牲 等
ムセヲ ナチヨナレは此ちの一部に移さ
れてあり さらに古代装飾彫刻
及墓碑銘の断片等陳列せられて
居る 次にガーラプラシディアの墓
所に行くそこにも 五世紀のモザイク
が見る 天井の中央にあるキリスト
洗礼の図は極る優れたるもの也
次きに
ドーモの近くのバプチステロを
見た 象牙の扉 ドーモの内陣に
象牙彫の椅子そこにビザンチン

図 16



小彫刻の技術を訪ふに恰好のもの
也
サンアポリナレ又オポをも見た さらに
キリストの礼拝の大画面 本堂の
両側にモザイクを以て飾る 男女行列の
十一時四十分ラヴェンナ発五時半
にフロレンスに着ホテルベルキエレに宿
此る山を過ぎ地形丘陵なる情
勢 小雨降り 駅にて昼食
に大ふ嘔 午後 ゆるく休
き

「二月六日」「フロレンスの一日」

朝サントリニタに行くさらにギルランダイヨ
の壁画(フレスコ)あり
次にバディアに行くさらにフィリッポ
リッピの聖母を見るべしナール
次にバチステロに行くモザイクを見る
次にウヒッチ美術館に行くジョット チマ
ブエ ボチセリ等の作多し
ポンテベッキヨ(古い橋の意ポンは橋)の
両側に宿屋のある中を通り
通りて「ピッチ美術館」に行く さ